



窓から見える風景

公益財団法人日本植物調節剤研究協会 評議員
日産化学株式会社 農業化学品事業部企画開発部長
瀧井 新自

1970年の初頭に父が一軒家を買った。兵庫県西宮市の閑静な住宅街の借家から隣の市へ引っ越しをしたのはおそらく、5月ぐらいだったと思う。それまで暮らしていた借家は、庭が広く、小さな砂場や鉄棒があり、三輪車で走り回った記憶がある。子供の私にとっては格別な世界であった。特に日当たりの良い南側の庭から、家の北側に入ると、神秘的で何かが潜んでいるような気配を感じた。湿った薄暗い空気の淀みと匂いが広がっていたことと、おそらく、植相が変わることによる風景の違いが大きく影響していたのではないかと今は思う。

さて、引っ越しした先の家の庭は狭くなり、家周りを三輪車で一周できなくなった。鉄棒は借家の家から移設されたが、遊びのための十分なスペースが無くなった。それまでの世界ががらりと変わってしまった。しかし、この家での思い出が、その後の私の人生に大きく影響を与えた。

玄関を入りまっすぐな廊下を進むと、突き当りにキッチンがあり、大きなテーブルがドンと構えていた。因みにこのテーブルの真ん中には蓋があり、開ければ鉄板を置いてお好み焼きが焼ける優れものであった。このテーブルを超えると大きな窓があり、そこから見える景色が圧巻であった。当時3～4歳の私の視界に水平線上に広がる水田が見えたからだ。この水田の用水路にはザリガニ、ドジョウやカメなどが生息しており、夜になると蛍が飛んだ。水田の左側には緩やかな丘陵が森を成し、カブトムシやクワガタなどが捕れた。あの風景を思い出すと今でもワクワクした気持ちになる。残念ながら同年の12月には父の転勤が決まり東京に引っ越したのだが、この経験は私の中で今でも活きている。

2000年前半に妻と家を買った。幸いにも家族が増えることになり、手狭になった社宅から転居することにした。当然、新居の窓の外に水田はなく、裏手に由緒あるお寺の墓地が見えた。この墓地は彼岸になると花畑のようになる。そこにアゲハチョウ、クロアゲハ、ツマグロヒョウモン、ヤマトシジミたちが訪れることに気付いた。偶然にも息子が蝶に興味を示すようになり、図鑑を眺めてキアゲハの幼虫の実物が見たいと言いだした。早速、プランタにニンジンとパセリの種を

蒔いた。ある日気付くと5頭の幼虫がムシャムシャとパセリを食べていた。彼の夏休みの自由研究は、「キアゲハの観察日記」となった。家の周辺から視野を広げて、近くの公園を巡ると、クスノキやミカン科の木が植わっており、これらを食草とするアオスジアゲハ、クロアゲハやモンキチョウがいることが分かった。また、かつての分布域は九州や四国南部までであったナガサキアゲハも温暖化に伴い、東京近郊でも見られることを知った。秋が近づくとホソバイラクサ、カラムシなどイラクサ科を食草の一部とする、キタテハ、アカタテハやヒメアカタテハが飛翔し、クズやフジなどマメ科を食草とするウラギンシジミがちらちらと目立って視界に入るようになる。すっかり蝶の数が減り、ヤマトシジミがカタバミの周りをひらひらと舞っている姿に冬の到来を知る。年が明けてマメ科、クロウメモドキ科を食草とするキタキチョウ、アブラナ科を食草とするモンシロチョウが飛び出すと、春が近いことを知る。やや遅れて同じアブラナ科を食草とし、モンシロチョウによく似たスジグロシロチョウが現れる。この蝶は近年東京近郊ではショッカサイが増えていることから良く見られるようになった。更に、同じシロチョウ科のツマキチョウが出てくる。後翅の裏に緑色の雲状の模様があるのが特徴で、1年でこの時期だけしか観られない。毎年無事に観ることができると食草の生息地も変わってないのだと安心する。

幼い頃に、昆虫を知った。そして、それを育てるためには食草が必要であることを学んだ。会いたいものに会えることが新たな知識を与えてくれる。

昨年4月、1993年に入社した研究所から本社へ異動した。水田がある景色が、コンクリートの間から覗く東京湾となった。そして時同じくして始まったこのパンデミックは、現在も変わらない。早く自由に動き回りたいものである。